魔を運ぶ狼

璃慧紗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔を運ぶ狼

【Nコード】

N0741Q

【作者名】

璃慧紗

【あらすじ】

魔王の隣に立つのは姿無き忠臣。その姿は名のとおり見たものはいない。誰が尋ねても魔王は教えることはない。その者の代わりに誰かが隣に立つことも許されず、その者を愚弄するような発言は生きている時の最後の言葉となる。

魔王と忠臣の狼の物語。

？ 誓い（前書き）

初めまして、璃慧紗と申します。

読んでくださりありがとうございます。

？
誓い

「ローデ」

俺の名前を呼ぶ声がする。

「そこにいるのだろうか？はやく来い。」

しびしび俺はそちらに歩み寄る。差し出される手。頭をなでられるのもいつものことだ。

「いい子だ。私のもっとも信頼する忠臣よ。」

笑い声が響く。長い黒髪がゆれ、私の鼻にあたりくすぐったさを感じる。

「お前は好きなのところにいてよい。好きなことをして、どうしようが問題はない。」

もとよりそのつもりだ。俺は一箇所にどまるのは好きではない。

「けれども。お前の帰る場所は私の隣だ。」

そう。俺の隣にたつのは貴方だけだ。

「そうだろうか？私の絶対なる忠臣よ。」

俺は絶対などないと思っているが。貴方の言うとおり、こう言お

う。

俺は魔王あなたの忠実なる臣である。

? 誓い(後書き)

誤字・脱字がありましたらお知らせください。

作品の批評、まっています。

？ 出発（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

？ 出発

気の赴くまま野を駆ける。あたりは暗い。前もまったく見えない。それでも俺は駆け続けた。目的地は決まっているのだから。

「ロード。お帰り。」

手招きをされ、言われるまま歩を進める。今回もまた頭を手がな
でる。

「駆けてきたのか？」

その問いに首をふる。何も喋らない俺に対して、その唇が歪んだ。

「そうか。その様子だと、またどこかに行くのだろうか？お前は気分
屋だからな。」

さすが分かっている。そのとおり、俺は出かけることを告げに来
た。

「では、行って来るといい。ただ」

そこで言葉を切られる。俺が顔を見る前に続けられた。

「帰ってくるのだぞ。」

俺はまた首をふるだけ。それでも満足そうな表情をされる。

「お前がいない間はあやつらと争う気にならん。無駄な時間だ。早く帰ってきてくるといい。」

その言葉を最後に、俺は駆け出した。

？ 出発（後書き）

誤字・脱字がありましたらお知らせください。

？ 発見（前書き）

遅くなりました、すみません・・・。

読んでくださりありがとうございます。

? 発見

「勇者さまだよ、この村に来てくださるんだ!」

「勇者さまが!? 私の家に来てくれないかしら!」

勇者? 王城にくる人間のことか? あの玩具おもちゃを何故待つ。

「きつと格好いいに決まってるわね。お姿が見たいわ!」

「神官の女の子もいるんだろ? お近づきになりたいな・・・」

あの姿の何がいい? あの方に比べたら路傍に石と同じ。いや、比べるのさえおかしいな。

神官とは白い光を放つ女か。いつも勇者の次に滅されるな。始末するのはいつも王だが。

家々の間から集団が見えてきた。数えて5人ほどだろうか。もう死に行くようにしか見えないのは俺だけではないだろう。

「あれが魔王を倒してくださる勇者さま一行ね。」

「ああ。これでやっと魔王が倒される。俺達も幸せになれるな。」

倒すだと？冗談もほどほどにして欲しい。いつもあの方の新魔法の実験体になっっているではないか。

さて・・・あの方のお手を煩わせないように俺が始末するべきか。まだ魔界への入り口へは遠い。もう少し様子を見るとしよう。

俺は集団から距離を取りつつ、見失わないように後を追った。

? 発見(後書き)

誤字・脱字がありましたらお知らせください。

？ 野音（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

申し訳ありませんが、受験生のため、更新を休止させていただきました。
す。

次の更新は二月下旬になるかと思われます。

？ 野言

「ここらへんで野言だな。」

「そうだな。薪を拾ってくる。」

「村に泊まればよかったのに。」

「仕方ないだろう？勇者一行が民に金を使わせたら。」

「そうだけどさあ・・・」

男女4人が座っている。一人は薪を拾いにいったようだ。俺はある程度距離を開けた草むらから覗いていた。俺に気付かないとは、やはりただの人らしい。勇者とは名ばかりなのか？

「<火よ！>」

女の一人が手をかざして集めた薪に火をつけた。どうやら魔法が使えるらしい。今回の玩具は面白そうだ。あの方が喜ぶだろう。

「ねえブレイブ、魔界への入り口はまだなの？」

「あと少しだ。」

「えー？この前もあと少しって行ってたわよね？」

「そうだな。だんだんと飽きてきたぞ。」

「仕方ないだろう！魔王の使いがそこらへんで監視してるかもしれないんだ、慎重にいかないと！」

魔王の使い？誰だ、それは？

「魔王の使い？ああ、あの姿無き使いね。」

「なんだそれは？」

「知らないの？魔王の絶対なる臣。その姿は誰も見たことがないの。これまでの勇者の一人も。その臣は魔王に私達勇者一行のことを伝えるのよ。今どこにいて、誰が何を喋っていたか、とか。」

「なんだと！それじゃあ俺達の会話もか？」

「そういつこと。私は信じていないけどね。」

俺のことか？しかし私はすぐにあのお方にお伝えはしていない。勇者が魔界の門をくぐった頃に帰るだけだ。今回はその使いの代わりに俺が言うことになるとおもつが。

「さつさと魔王を倒して帰りたい！ブレイブ、しっかりしなさいよ、あなたが勇者なんだから。他の国より先に魔王の首を取るんでしょっつ。」

「そうだが・・・コンフィ、君がそんなに強気だと使いに聞かれているかもしれない。気が気じゃないよ・・・」

どつやら勇者はあの弱気な男らしいな。魔女がああ強気な女。きつと最後と最初に滅されるだろう。

「さあ、今日はもう寝よう。」

「そうだな。」

「私も眠いわ。」

「ええ。」

「火の番は俺がしよう。」

「それじゃ皆、お休み。」

「「「「おやすみ。「「「「

「どうやら眠るようだ。俺も休憩を取ろうか。しばらくは暇になる
しな。」

? 野音(後書き)

誤字・脱字がありましたらお知らせください。

？ 記録書（前書き）

お待たせいたしました。更新を再開いたします。

? 記録書

「ああ、もう！なんでこんなに魔物がいるのよ！邪魔だわ！」

「そういうなよ・・・分かったことだろ？」

騒ぐ魔女。宥めるように言うのは勇者だ。

「だって、無駄に強いのか弱いくせに数だけが多いのかいるんですもの！」

「コンフィ、落ち着いて。怪我治療するよ。」

「あ、ありがと、ルル。」

相変わらずだな、あの魔女は。自信が有り余っている。それに、魔物を甘く見ているな。ああいうのは早死にするらしいが。俺に未来は分からない。分かっているのは、あやつら4人が命を消されることだけ。

「さすが、ルルね。どんな怪我もすぐ治せちゃう神官。いてくれてよかったわー。」

「あはは、どういたしまして。私もコンフィがいてくれてよかった。強いし。」

なるほど、あの背の低い人間の女は神官なのか。これは好都合。あのお方は神官で試す機会が少ないともらしていた。きつと喜んでくださるだろう。たどり着ければ、の話だが。

そうしているうちに4人が移動を始めた。俺も距離を開けてついていく。後をつけ始めてから月が20回以上昇った。その間ずっと張り付いていたわけではないが、だいたいの動向は知っている。あれだけ騒げば見失うこともない。

「魔物が多いってことは魔界への入り口が近いつてことだからな。それに魔界にはさらに大量の魔物がいるんだぞ？これくらいでさわぐな。」

ん？そういつているのは勇者だな。何人も勇者を見てきているが、どの勇者も成長する。肉体的なのはもちろん、精神的にだ。今回の勇者は気弱だったのが（おそらく）強気になっているらしい。人間の成長など俺には理解できないのだが。

「いやだわ・・・魔界ごと消滅しないかしら？そうすれば魔王も消えるし、問題ないわよね？」

「なっ！？コンフィ、使いに聞かれるぞ！！まあ、そのほうが楽ではあるが・・・。」

「ブレイブは使い恐怖症だな。まあ、子供のころはみんな聞かされるからな。『良い子にしないと使いが魔王に知らせるぞ。』」

「『魔王が攫いに来てお前を食べてしまうぞ』でしょ？私も何回も聞かされたけど、体験した人がいるわけじゃないからね。ブレイブもジェイも心配しすぎよ、ねえ、ルル？」

「ここまで強気になるとはな。あのお方にせいぜい可愛がられるだろう。それにしても使いとは誰なのだろうか。あのお方に忠実なる臣が俺以外にいるとは、知らなかった。」

「魔界には爵位があるし將軍の位もある。そして弱肉強食だ。あのお方に滅多に逆らうものはいないが、それ以下の者は争う。信用できるものも少ないのだが。忠臣ならば、会ってみたいような気がする。」

「・・・コンフィ。私が教会で育ったのをしていますよね？」

「ええ、知っているわ。しかも総本山でね。どうかした？」

「・・・禁じられた書庫にこんな記録書があります。それは勇者一行で生き延びた者が書いたものです。」

『私の後の勇者とその連れの者達にこれを書き残す。汝等の周りに使いがいる。魔王に暴言を放つてはならない。もしそのような言葉を発すれば、地獄を見ることとなる。油断をするな。魔王と、その使いを甘く見てはならない。どうか、二度と私のような者がでないことを望む。』

この著作者はこれを書き記したあと、すぐに天に召されました。まるで、魔王が魔界にすればどうなるかを知らしめるかのように・・・。

場を静寂が包んだ。いきなり、魔女が立ち上がった。

「大丈夫よ、ルル！どうにかなるわ！」

「コンフィさん？」

「私は魔女よ？ブレイブは勇者。ジェイは騎士。ルルは神官。この4人に負けはないわよ。もし負けたとしても、私は後悔しないしね。」

「そうだな、勇者である以上戻ることは不可能だからな。だろう、ジエイ？」

「ああ。騎士として敵に背中を見せることはできないな。」

「みなさん・・・!」

自然と笑顔が出始めていた。知らないことは幸せなのかもしれないな。

これ以上はいなくてもいいだろうと俺は判断して、その場から離れた。

すっかり暗くなった空を見上げ、ふと描くのはあのお方。もうすぐ戻ることになりそうだ。きつと、いつもどおり頭をなで、俺の名を呼ぶだろう。

その後、玩具がきたという知らせにあのお方だけが浮かべる笑みを見せるはずだ。君臨しているあの方だけの笑みを。

そういえば。あの4人の会話に出てきた生き残り。あれはたしか、あのお方が余興と行って生かした男のことではないだろうか。かけられたものをじわじわと追い詰める毒の

新しい魔法を作ったとあのお方が嬉しそうに使っていた。そうか、国までたどり着いたのか。まあ、こちらに不都合がなければどう

でもいいが。

今日は月を見ていよう。そういう気分なのだから、俺としても不思議だ。

? 記録書(後書き)

読んでくださりありがとうございます。

? 夢(前書き)

読んでくださりありがとうございます。

？ 夢

「なあ、ロード。このところ勇者が来ないな。新しい魔法をつくったのだが。」

あのお方の声だ。玉座が見える。

「試せないと暇なのだよ。・・・少し、魔物を遊ばせて見るか。」

顔に浮かぶのは楽しむような笑み。臣下の者の前ではこの表情は見せない。このお方はあの者達を信じるに足らないと思っている。見ることができるのは俺だけだ。その事を嬉しく感じる。

「勇者が来た頃に帰ってくるといい。しばらくは先になりそうだがな。新しい魔法は、見た目にも気を使ってあるから、見る価値はあるぞ。」

いつもは、王の間が真っ赤になったり、大穴が空いたり、となっていた。俺は見たため気をすることは無いが、このお方が言うなら帰ってこよう。

「出かけるのか、ロード？そうか・・・では、行って来い。」

その声と同時に、私は王の間をでた。

「ここなのね、ブレイブ？」

「そうだ、コンフィ。ここが　　魔界への、入り口だ。」

勇者どもの声が聞こえる。ああ、今のは夢だったか。

「皆・・・今なら、」

「ブレイブ。私は行くわよ。」

「俺も。」

「私も、です。」

「・・・いいのか？今なら戻れる。この先は死ぬかもしれないんだぞ？」

ん？ああ、勇者一行によく見られる『最終確認、という名の仲間意識の向上』だな。魔界への入り口が近くなると殆どの勇者が問いを発する。もはや恒例行事だ。ちなみに、あのお方がいらっしやる魔王城の前でも、繰り返すケースが多い。

「いいんだ。俺達はお前についていくって決めたんだぜ？勇者殿？」

「そうよ。ね、ルル？」

「はい。だから、皆で進みましょう。」

「だが」

バキッ ズサア・・・

「つべこべうるさい！私達はあると死ぬ覚悟もできてるのよ！」

「そうです。ここまで一緒に着たんですよ？最後まで行きます。」

「ということだ。分かったな？」

「皆……!!」

やはり、この一行も勇者を殴ったな。勇者の目がキラキラしている。言つては悪いが、気持ち悪い。というか、殴るとか青春物か？と思う俺はおかしいだろうか。

今回は珍しく、殴ったのが魔女だったが。そこまでやるとはな、その魔女。

「そつだな！一緒にいこう、皆!!」

勇者一行が動きだした。さて俺も動くでしょう。あのお方の下に。きつと新しい勇者の知らせを喜んでくださるだろう。

? 例外(前書き)

読んでくださりありがとうございます。

？ 例外

「お帰り、ロード。そろそろ戻ってくるんじゃないかと思っていた。」

俺はあのお方の下に近寄る。手が俺の頭に置かれた。

「この姿をみるのもいいが、お前のあの姿も見たい気分だ。ん？あ、ロード、お前が言いたいのは新しい勇者のことだろう。お前が帰ってくるのはいつもその時だからな。魔界に人間が入ってくるのは分かるが、ここを指す勇者なのかは私には分からない。やはりお前がいなければ駄目だな。さてさて、下準備をしようか……。」

笑い声が響く。久しぶりに聞く声だ。夢ではなく、現実の。

「ロード？勇者一行の様子を見たいのか？そうか、お前が興味を持つという事は期待できる者のようだな。ならば、行ってこい。私はここで、ゆっくりと待っていよう……。」

その言葉を聞き、俺は夢と同じように王の間を出た。

「神よ、どうかこの者に慈悲を」

神官の声とともに勇者の傷が治っていく。

「ありがとう、ルル。」

「ほんとよ、まったく怪我しすぎ。ルルが大変でしょう?」

怒ったような声を出すのは魔女だ。魔界に入ってから表情から苛立ちが消えない。勇者が怪我をすることにか、魔物がでることにか。俺にはわからないが。

「悪かったな、コンフィ。ルル、大丈夫か?」

「はい、私は大丈夫です。」

「おーい。向こうにいた魔物は倒したぞ。意外と弱いんだな、魔物って。」

笑われたのは騎士。体にはべっとりと返り血がついてる。本人の血の混じっているか?

「ああっ！！ジエイ、あんたも怪我して！」

「ん？ああ、ほとんどは返り血だ。自分のはかすり傷程度だよ。」

そうか？そのわき腹からの出血がかすり傷？騎士とはそんなに頑丈な体なのか。驚いたな。

「嘘でしょ！！治療してあげるからこっちきて。ああもう、なんで弱いくせに数が多いのよ！！」

魔女が包帯をきつく巻きすぎて騎士が悲鳴を上げている。それから神官に治療してもらったほうがいいのではないか？・・・ああ、神官は疲れているらしい。やはり人はよわいな。もちろん、騎士もな。

さて、さきほど魔物が弱いといわれていたが・・・それは当たり前だ。一勇者（実験台）に死なれたら困るということであのお方が魔物を強くさせないのだ。ただ、数は変えられないので多いのだが。たまに魔物で例外がいるが、気にしないでいいだろう。

「ガアアアアアア!!!」

「くっ……!コンフィ、援護を!」

「分かってるわ!火よ!」

魔女の声とともに現れた火が魔物に向かって飛ぶ。

が、魔物がその火をいとも簡単に消した。お返しとばかりに勇者に切りかかっている。

「はあっ!」

それに応戦するのは騎士か。勇者は一旦はずれ、神官に簡単な治癒をかけられている。

「なんだってんだ、こいつは!いままでのより強いぞ!」

「こんなのがいたなんて!」

「ガアアア!!!」

そう。勇者一行の目の前にいるのは一体の魔物。いつもなら楽に倒せただろうそいつは、例外的強すぎる魔物だった。それにしても1000分の1の割合でいるこの魔物にあうとは、運がいいのか悪いのか分からない奴等だ。

「雷よ！火よ！風よ！」

魔法の魔法もすべてはじかれる。もしくは消される。勇者の剣は有効のはず（聖なる力の塊だから）だが、あたらないのでは意味がない。

さて、困った。これは俺がしとめるべきか。あのお方は実験体・
・ではなく勇者をまっしておられる。やはりここは私がいくべきだろう。

俺は魔物に向けて走り出した。

といっても、俺にとって距離はたいしたことは無い。たとえそれが人間の足で一日かかるであろうところを数秒で駆け抜けることが可能だ。

魔物は俺のによって勇者一行より数キロはなれた場所に投げられた。

「グルア・・・」

数キロの一瞬の移動は魔物にとっていいものではなかったらしい。きつと現実を受け止められないのだろう。そもそも魔物にそんな考えができるとは思わないが。

「ガアアア!!!」

やはり本能なのだろう。俺に向かってきたので、とりあえず足で蹴った。

どさつと音が聞こえ、魔物の動きが止まる。やはり、この姿のほうがかついうときは便利だな。駆けるときはあまりこの姿にはならないが。適材適所、ということだろう。

「グルルルウルルル・・・」

おや、警戒態勢か。しかたない。こちらから仕掛けるとしよう。

「ガアッ!?!」

俺が目の前に現れたことに驚いたのか、魔物がおかしな声を上げた。俺はそれにかまわず頭　おそらく目があるからそうだろうを蹴った。飛ばされる魔物。それをおい、今度は手で放り投げる。上にとんだものを追い、今度は地面に叩き落とす。

そういえば勇者一行はどうしたか、と思考が移動しそうになるのを押さえ、ふと視線をしたにさげると、地面には真っ赤な何か広がっていた。

これでいいな。俺はおそらく勇者一行がいるであろう方に目をやった。今は治療中だろう。さて、もう魔界も城が近くなってきた。もう例外は出ないだろうし、城に戻るとしよう。あのお方もお待ちのはずだ。

視線を城がある方向に向け、俺はまた駆け出した。

？ 例外（後書き）

誤字・脱字がありましたらお知らせください。

？ 王城（前書き）

前回の更新からかなり間が空いてしまいました。申し訳ありません。読んでくださりありがとうございます。

? 王城

「帰ってきたか、ロード。・・・例外が出ただろう。」

すでに知っていたらしい。さすが、魔界を統べる方だ。

「ロード・・・私は今回、新たな考えを持った。」

新たな考え？新しい魔法を作ったとは聞いたが、なんなのだろうか。

「そろそろ、勇者がわずらわしくなってきたいるのだ。そこで」

「覚悟しろ、魔王！」

陳腐なせりふと共に、王の間に勇者一行が現れた。それぞれ、体のいたるところに傷を負っている。

「ようこそ、と言つべきかな。おお、神官殿も無事来られたようで何よりだ。」

あの方の声が心なしが浮いている。

「なんだと！あれだけのことをしておいてなにを言つ！」

「なんのことだろうか。私は、なにもしていないが？」

「ふざけるな！この王城には、俺の前に来ただろう勇者のゾンビがいた！俺に襲い掛かってきたんだ！」

ああ。あれか。しかしそれにあのお方の非はない。なぜなら。

「あの者達は、自ら望んでそうなったのだが？」

「?!」

勇者が驚いたような顔をしてる。と、今まで黙っていた魔女と騎士が口を開いた。

「何言っているの？自分からゾンビになろうなんて考えないでしょう？！」

「そうだ、仮にも勇者だったんだぞ！！魔王を倒しに来た勇者が！」

「それは違うわ。まったく、学習しないのね、人間も。」

「お前は・・・？」

どこかで聞いたことのあるせりふだ。その声の主は玉座の近くに立っていた。

「私はイザベラ・マージナー。元魔女の王妃よ。」

「王妃・・・？」

「元魔女ですって・・・?!」

「どつやら勇者達は驚きで声がでないらしい。」

「イザベラ。」

あのお方が王妃に声をかけた。

「勝手に来てしまい、申し訳ありません。しかし、今回は魔女がいと聞いたものですから……。」

「良い。あの魔女は血縁者なのだろう？今回は許そう。」

そう言って王妃を抱き寄せる。どつやら、お二人の仲はいまだに良好のようだ。

「一つ、聞いてもいいかしら？」

魔女が口を開いた。恐る恐る、といった具合に王妃を見る。

「なにかしら？」

「貴女、魔女ってことは、魔王を倒しに来た勇者の仲間だったのよね？なんで、王妃になっているの？」

それにたいし、王妃は嫌な昔を思い出すように顔をゆがめた。

「倒しに来たのは何百年も昔の話よ。もう忘れたいわ。陛下を倒しに来たなんて、恐れ多い……。」

「どついう意味？」

「そのままよ。……私からもきいていいかしら？」

「……いいけど。」

「貴女、魔女として町の人から疎遠にされなかった？」

「！」

今度は魔女が驚いたような顔をした。何故分かるの、とでもい言いたげに、先を促す。

「だって、私もそうだったもの。・・・魔女っただけで、みんなから・・・石を投げられたこともあったわ。挙句の果てには、国のために魔界へ行け、って・・・」

王妃の顔を伝った涙を、あのお方がぬぐう。それに笑顔を返し、王妃は動かない魔女を見つめた。

「陛下を倒すのはおやめなさい。どちらにしろ、無理でしょうけど。貴女さえ良ければ、魔界に住まない？こちらには、魔女を迫害する者もないし、逆にとても大切にしてくれるわ。」

「嘘だ！惑わされるな、コンフィー！こいつ等は、キミを陥れようとしているー！」

「ブレイブ・・・」

勇者が口を挟んだ。そのまま声を張り上げる。

「魔王は悪だ。魔界に住むものすべてが！それをなくし、平和を保つために来たんじゃないのかー！」

「でも・・・でも、あの人が言っていたのは私と同じだわ。私も、同じような環境にいたの。・・・正直言うとな、私、国に忠誠心な

んでないのよ。」

「コンフィ?!」

とつとつ、仲間割れしたらしい。

「こちらにいらっしやい、魔女。いえ、コンフィ。私は貴女を歓迎するわ。」

魔女が王妃に近づく。のこりは3人。

「ようこそ、魔女殿。・・・さて、勇者、騎士、神官よ。そなたらはどうする？私に反逆をしないと誓えば、生かしておこう。」

その言葉を同時に、王の間に仮面をつけた者達が集まる。

「ちゅ・・・どじするん?」

? 王城(後書き)

誤字・脱字があれば、お知らせください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0741q/>

魔を運ぶ狼

2011年4月5日21時10分発行